

最優秀賞

一級建築士事務所 大角雄三設計室

大角 雄三

【作品名】

倉敷の町家

(ゴールドドロップのあかり)

設計 一級建築士事務所 大角雄三設計室

施工 有限会社 住まいの伏見

竣工日 2021年2月18日

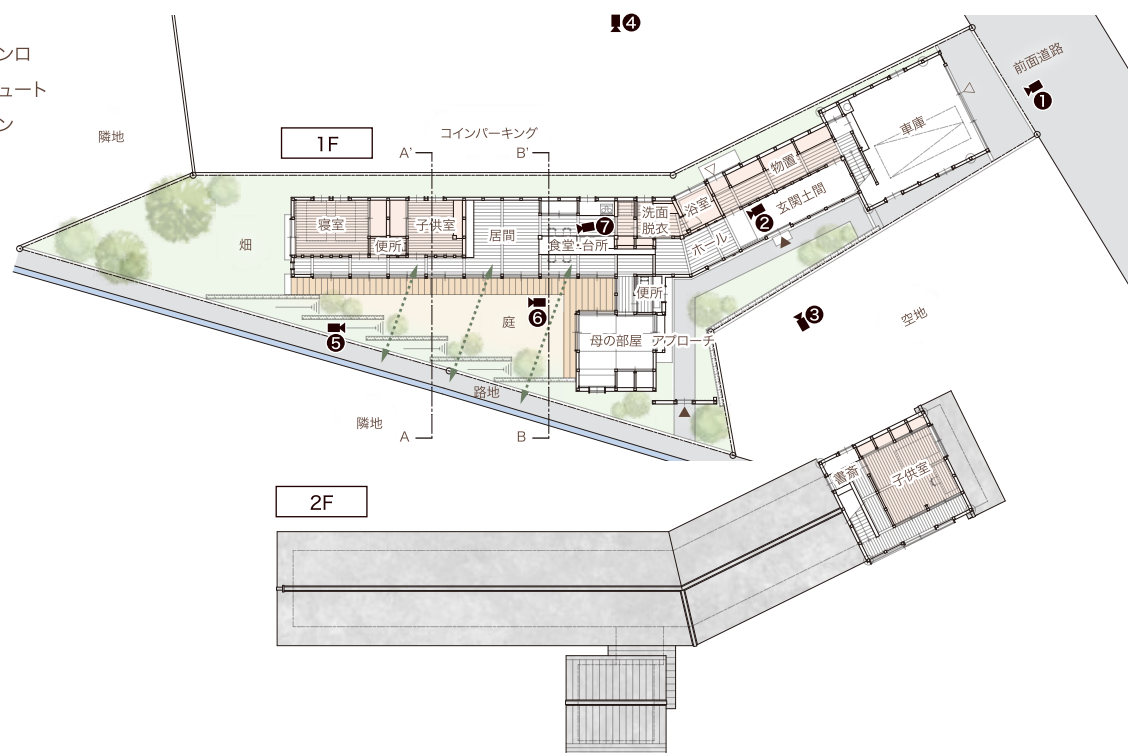
建物概要

建設地	岡山県倉敷市	延床面積	190.99㎡
敷地面積	402.91㎡	構造・規模	木造2階建

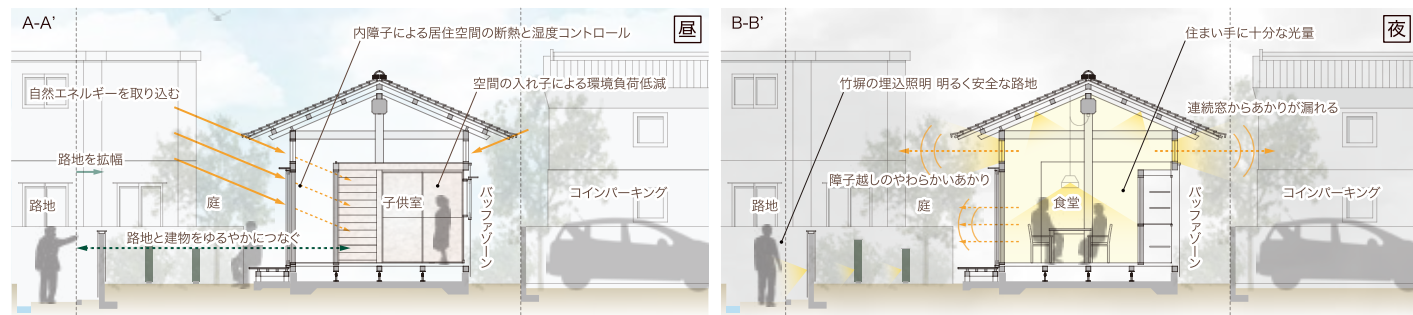
設備面の特記

厨房機器	ガスコンロ
給湯機器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

平面図



断面図



設計コンセプト

倉敷駅前大通りを南に5分ほど歩いた所にある敷地で、古くからの町割りが残るエリア。周辺は伝統的な町家や生活道となっている小さな路地、駅前再開発エリア、古民家が解体されて歯抜けになり空き地やコインパーキングになったもの等、新旧様々なものが混在している。

建物は間口6m、奥行45m、中腹で30度ほど折れ曲がる敷地形状に沿わせた配置とし、「くの字」に曲がったウナギの寝床のような木造二階建ての町家形式をとっている。敷地の南側には道幅の狭い路地があり、この路地を積極的に取り込んでいる。路地/セットバック/竹塀/地盤の高低差/植栽/中庭/縁側/障子・欄間/内部空間といった具合に、緩やかに敷地境界から建物内部をつかず離れずの関係になるようにデザインした。昼間は障子の開閉により、

開放的から閉鎖的な使用が可能で、十分な光量と通風、適度なプライバシーがあり快適に暮らせる。細長い間取りに対し、寝室や水廻りは入れ子状にコンパクトにまとめ、空調負荷を減らしている。

建物の南北両面にはハイサイドの連続窓、東面には倉敷格子や色塗りのガラス小窓を設け、美しいあかりがこぼれる。この家で考えたことは「省エネだけ」でなく、「省エネだけ美しい景観」を生み出すデザインである。あかりを灯す喜びをもう一度真剣に感じること。建築がフィルターとなって光を抽出し、地域全体に光の雫が広がる。

審査委員講評

前面道路側のファサードと南側裏路地の2面性を持つ敷地に対して、伝統的なエッセンスを用いながらも現代的なデザインによってこの場所の持っている可能性を引き出している秀逸な住宅です。近隣との適度な距離感を生む様々な操作がプライバシー性や採光・通風を丁寧にに取り込み、まちに開くデザインは住まい手だけでなく、路地を歩く人にとっても心地よい場所性を提供しています。



- 倉敷の町並みに学び、瓦・漆喰・倉敷格子等で構成するファサード。
- 建物は職人の手刻による仕事。特に棟丸太は職人の仕事が光る。くの字に折れ曲がる細長い建物をなぞるように丸太がのび、魅力的な空間をつくっている。夕刻には連続窓の奥に棟丸太が浮かび上がる。
- 駐車側には上部にのみ開口を設けプライバシーを守る。
- 路地と居住空間をゆるやかに仕切る竹塀は敷地境界から1.0～2.0m程度後退させ、路地にゆとりを生み出し、たのしく歩ける空間に。



- 高さを抑えた竹塀・地盤の高低差や植栽等が、敷地境界を曖昧にし、公私をゆるやかにつなぐ。決して広くない庭でも、閉鎖性を減らす工夫により豊かで快適な居住空間をつくりだす。
- 居間・食堂。自然光を最大限活かせるように、南面に連続する開口を設けている。それらには内障子を設け、居住空間の断熱と湿度コントロールを担う。

國本建築堂株式会社
國本 広行

【作品名】
5坪の家
小宅～kota～



before



after

設計 國本建築堂デザイン事務所

施工 國本建築堂株式会社

竣工日 2022年10月3日

建物概要

建設地	広島県尾道市	延床面積	35.19㎡
敷地面積	71.24㎡	構造・規模	木造2階建

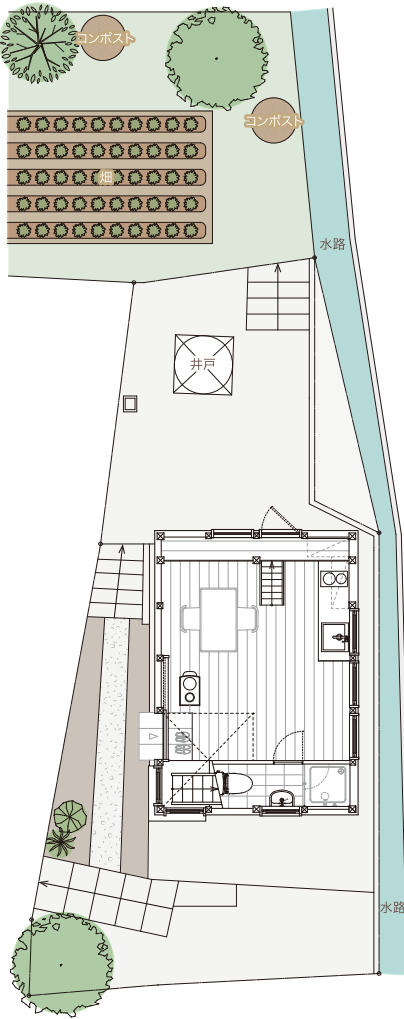
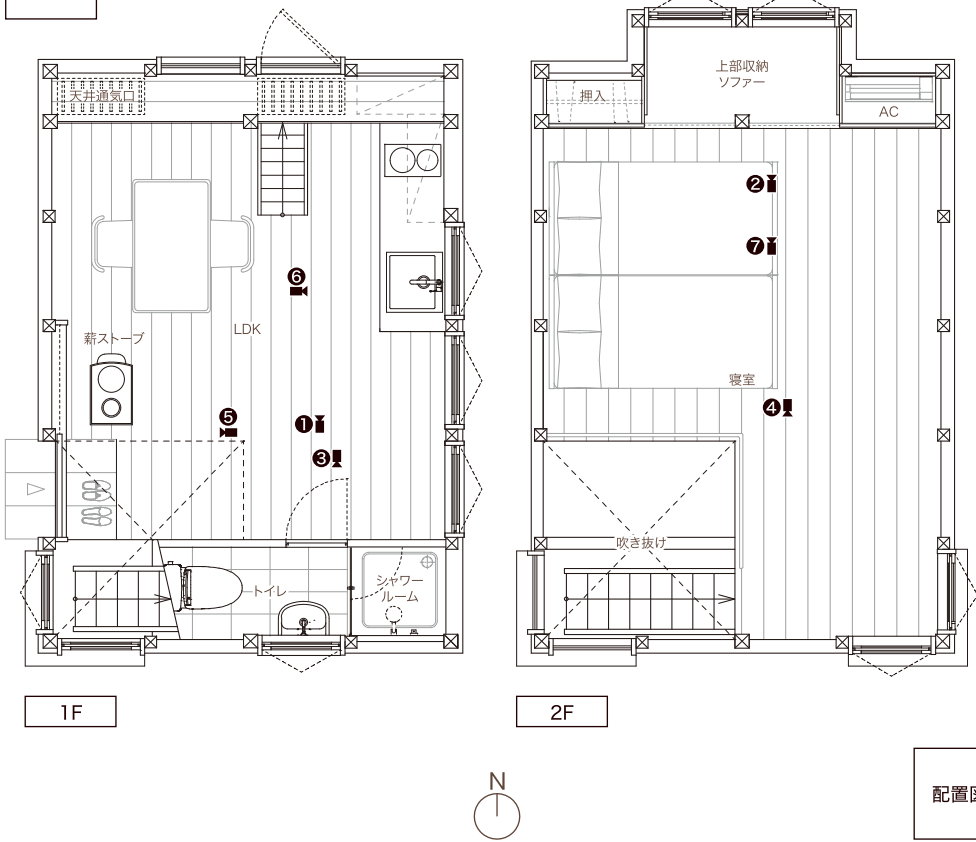
設備面の特記

厨房機器 IHクッキングヒーター

給湯機器 ガス給湯器

冷暖房機器 エアコン・薪ストーブ

平面図



設計コンセプト

便利すぎ、物にあふれた世の中に少しでも疑問を持ったことから始まった今回の家づくり。老朽化が進み改修が必要だった蔵を、夫婦2人がミニマルな暮らしを楽しめる5坪の家としてリノベーションした。過剰な機能を削ぎ落とし、最小限のスペースで叶うシンプルかつ快適な暮らしを追求することで、自然循環に即したサステナブルな住まいを実現した。

一般的な家に備わっている設備機器や間仕切りを全て見直し、生活の質を落とすことなく自然エネルギーや自然素材を活用できるものは代替えた。これにより、メンテナンスの手間や設置スペースを削減することができた。

具体的には、①1階に薪ストーブを設置して2階と完全に仕切らないことで、温度差で生じる気流で家全体を温める仕組みにし、空調機器

の縮小を図った。②場所ごとの必要な明るさや周囲からの視線、借景を意識して、日中はほぼ窓からの自然光のみで過ごせるようにし、カーテンの必要性を省略した。③床に無垢材、壁に珪藻土を採用し、自然の調湿効果で室内環境を安定させるようにした。

狭小空間から暮らしの豊かさを創出するために、最短の生活動線で動けるよう配慮した。特に造作キッチン、適材・適所・適量の収納計画とし、シンク下には作業台にもなる収納キャスターも造作した。さらに、1つの場所で多様な過ごし方が楽しめるよう、障子を閉めると読書部屋にもなるソファや、畑への勝手口にもなる窓など工夫を施した。

審査委員講評

ひと目見て可愛さと愛着を感じのお家です。

レベル差のある畑とキッチンとの関係や2階の段差ソファの居心地も巧みでシンプルさの中に設計者の力量を存分に感じさせます。薪ストーブや2階のエアコンの仕掛けも最小限のエネルギーで最大の効率を生み出しているように思われ、小ささが最大の省エネと改めて感じさせてくれる住宅です。



①



②



③

③階段下に、トイレ、洗面、シャワールームを凝縮。自然光が程よく差し込む。

④寝室の窓は遠くの景色を切り取る。部屋や2階との仕切りを最小限にし、視線に合わせた開口を設けることで、狭さや不便さを感じることなく、余計な手間のかからないシンプルな暮らしを実現。



⑤



⑥



④



⑦

⑤1階に設けた小さな薪ストーブ。2階と完全に仕切らないことで、気温差による気流で部屋全体が暖まる空間設計とした。

⑥適材・適所・適量で収納でき使い勝手が良い造作キッチン。キッチン下のキャスター付造作収納は作業台にもなり、自由に料理を楽しめる。

⑦入り込めるソファ。障子を閉めればひとり静かに外を眺めながら読書に没入できる1畳サイズの個室になる。

優秀賞

くらし設計室

穂垣 友康・穂垣 貴子

【作品名】

西条の家

設 計	くらし設計室
施 工	株式会社 隅田木造建築店
竣 工 日	2021年4月28日

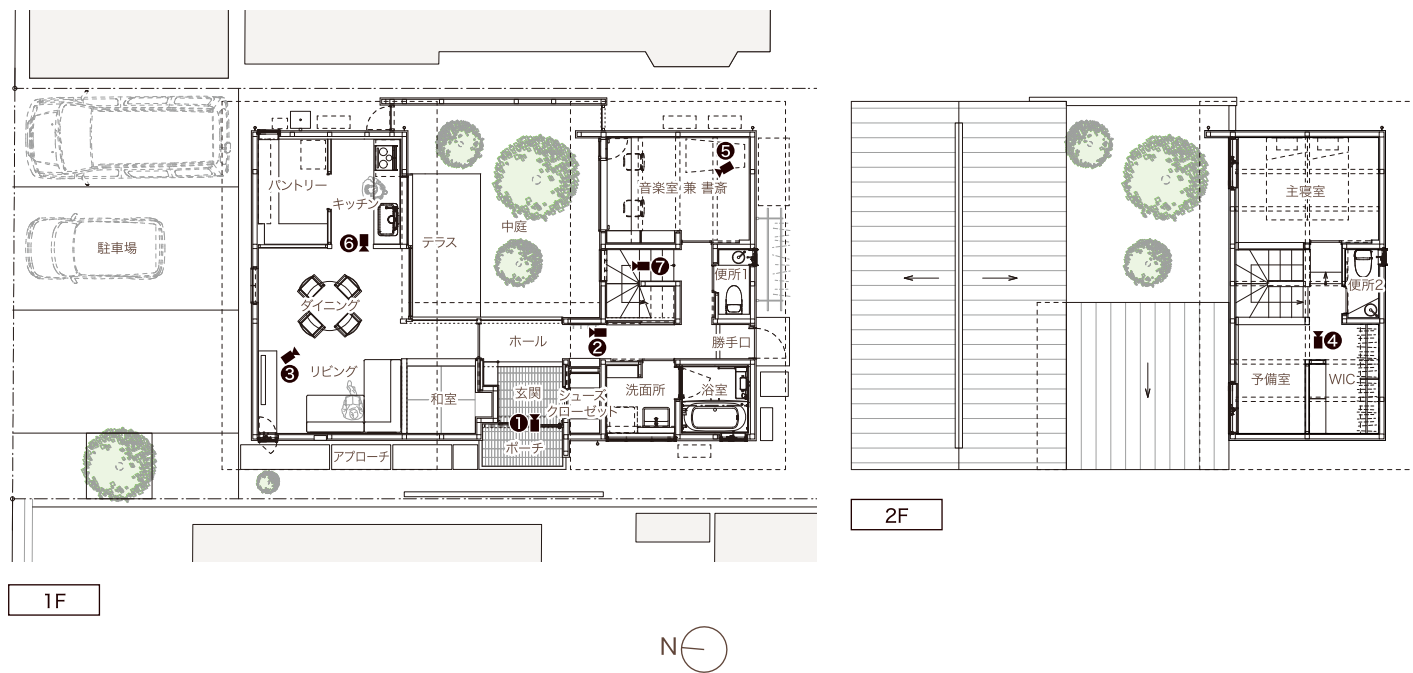
建物概要

建 設 地	広島県東広島市	延 床 面 積	94.16㎡
敷 地 面 積	199.00㎡	構 造・規 模	木造2階建

設備面の特記

厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン・床暖房(ヒートポンプ式)

平面図



設計コンセプト

緑豊かな学園都市である広島県東広島市。敷地は住宅や集合住宅が建ち並ぶ住宅街にあることから、周囲からのプライバシーを確保するようにコの字型の建物と自立壁(防火壁)で中庭を囲み、その中庭を抛り所として居場所が展開していく静謐な住まいをつくりたいと考えた。

計画としては、北側道路から切妻屋根の平屋のLDK、敷地中央に天井高を抑えた平屋の玄関・和室、隣地マンションからの視線を遮るように南側に2階建てのプライベートスペース・水廻りの3つのボリュームを配置している。

建物へは、光を抑えた西側アプローチより中央の玄関ポーチへ。扉を開けると中庭へとつながる空間が広がり、中庭からの光に満たされる。ホールは中庭と一体となるようにFIX窓とし、上部には隣地建物を

ぼかしながら視線を下部へと誘導するレース障子を設置している。レース障子は、和室の前まで連続することで流れをつくり、天井高約3.5mのLDKへと居場所を展開する。LDKは切妻屋根・柱を現しとすることでそれぞれの居場所をつくりながら、架構が連続するワンルーム空間となっている。ダイニングの窓は掃き出しで中庭のテラスとつながり、キッチンでは料理をしながら庭の緑を楽しむことができる。2階のプライベート空間へ上る階段は、光量を抑えながら異なる視点で中庭の緑を楽しむように足元に格子窓を設けている。日が沈むと部屋に明かりが灯り、中庭を含めたそれぞれの居場所が

審査委員講評

敷地環境を丁寧に読み解き、そこからボリュームを配したコの字形の中庭住宅です。

絶妙な居間の配置はもとより、玄関・階段・畳の間・DKと各所で光や中庭との関係が考えられた緻密な設計で、木製建具を多用しながらもその開き勝手を限定することで気密性を確保し省エネにも配慮されています。

完成度の高い大人の住宅です。



写真撮影／笹倉 洋平



①玄関ホール。扉を開くと中庭へつながる空間が広がり、明るい光に満たされる。

②切妻屋根・柱を現しとしたLDK。それぞれの居場所をつくりながら、ひとつながりの空間をつくりだす。構造材には、県産材の杉を使用している。



③廊下の窓は中庭と一体化するようにFIX窓とし、上部には視線を下部へ誘導するレース障子を設置。和室の前の廊下まで連続しLDKへと居場所を展開する。

④2階の切妻屋根も梁材を現しとし、主寝室と階段ホール、予備室までの視線が抜けるようにした。自然素材を感じながら小さな住まいの中でも広がりを感じるように工夫している。



⑤音楽室の窓は庭の景色を取り込むFIX窓と通風のための開き窓を組み合わせている。

⑥その場所の光と空間、暮らしに調和する自然の無垢材を使用した家具を作りたいと考えた。テーブル、椅子、ソファ、テレビ台はこの家のために製作。既製品ではなく地域の家具職人と共にすることで人と地域が繋がるようなものづくりの循環を目指した。

⑦穏やかな光に満たされた中庭。日が沈むと部屋の明かりが灯り、中庭を含めたそれぞれの居場所がつながる夜の風景が美しい表情をつくりだす。

株式会社 y+M design office

三宅 正浩

【作品名】

ビレッジプライド - ゲストルーム

設計 株式会社 y+M design office

施工 有限会社 坂根住宅

竣工日 2022年2月28日

建物概要

建設地	島根県邑智郡	延床面積	37.79㎡
敷地面積	415.44㎡	構造・規模	木造2階建

設備面の特記

厨房機器	IHクッキングヒーター
給湯機器	ガス給湯機
冷暖房機器	エアコン



before

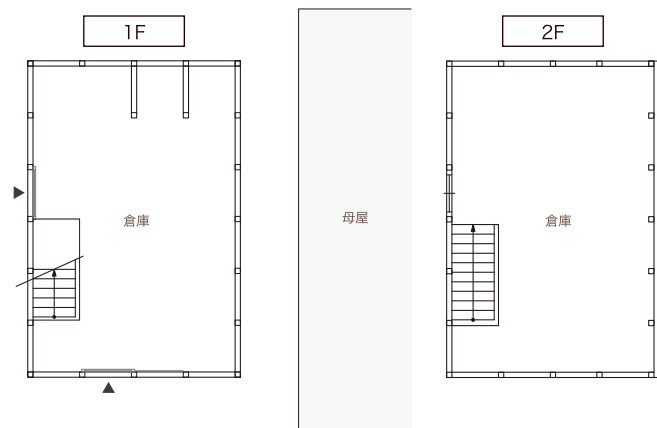


after

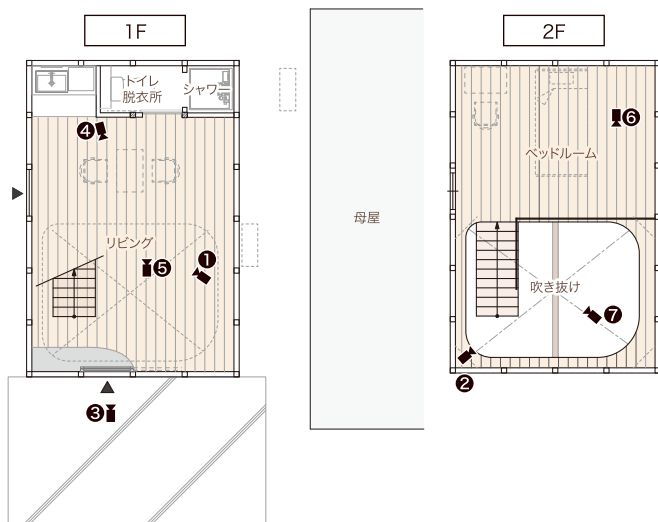


平面図

リフォーム前



リフォーム後



設計コンセプト

棚田や山林が広がる自然豊かな島根県邑智郡邑南町の於保知盆地に位置する。周辺は住宅が少なく、以前に比べると住人も減り、空き家が目立つようになってきている。そこで、使われていなかった築約80年の土蔵を、最小限の水廻り設備を持つゲストルームにリノベーションした。

細工が施された和錠を持つ昔ながらの小さな土蔵は、天井が低く圧迫感があったため、2階の床の半分近くを円形状にくり抜き、上下につながる開放的な空間とした。構造的には吹き抜けの四隅に火打材と構造用合板による補強を行い、水平剛性を高めている。また蔵の土壁が持つ断熱性、調湿性、風合いを生かして、新たな断熱材は必要箇所のみとし、内壁を真壁状にラウンベニヤとシナベニヤで包み、床材にあたたかみのある地産材の杉フローリング（無垢）を

採用した。

1階のリビングと2階のベッドルームが円形に穿たれた吹き抜けを介してつながることで、程よい距離感のワンルーム空間となり、大きな床梁や天井の海老虹梁などから、この地域に多く残る土蔵としての力強さが感じられ、地産材である無垢の杉フローリングが心地よい、特別感のあるゲストルームとなった。

限られた予算の中、地域に眠っている既存建物に昔ながらの良さを残しながら最低限の手を加え、これからも使い続けられるように甦らせる町医者的な試みは、地方に必要なサステナブルな取り組みの一つだと考える。

審査委員講評

古くからある使われていない蔵を最小限の手数でゲストルームに転用する好例であると感じました。外観は以前とは変わらない姿で佇みながらも、内部空間では一転柔らかな曲線によって上下階を繋ぎつつ構造的な剛性も担保しています。時代の変化に合わせながら大げさではない設計手法によって古くからある町並みに持続性を与えられる提案です。



- 1 2 3 天井が低かったため2階の床の半分近くを円形状にくり抜き、上下につながる開放的な空間とした。吹き抜けの四隅には補強を行い水平剛性を高めた。1階のリビングと2階のベッドルームが吹き抜けを介してつながるワンルーム空間となり、大きな床梁や海老虹梁から蔵としての力強さが感じられる特別なゲストルームになった。
- 4 断熱材を水廻りなど必要箇所のみにとどめ、蔵の持つ土壁の風合いを残しつつ、床は杉の無垢フローリングとした。
- 5 ミニマな空間に明るく天井が高いリビングと、低めの天井の落ち着いたあるベッドルームという相反する2つの部屋が関係しあう。



- 6 窓が小さく壁が分厚いため断熱性が高い蔵の特性を残しつつ、吹き抜けで1階と2階をつなぐワンルーム空間とした。
- 7 蔵は元来食料保存に適した建物で外気温に左右されにくい造りとなっている。そのままでは暗く、天井も低いために圧迫感があるが、吹き抜けと構造補強というマイナス面をカバーする工夫をすることで快適な空間となる。

春日琢磨建築設計事務所

春日 琢磨

【作品名】

元宇品のアトリエ

設計 春日琢磨建築設計事務所

施工 有限会社 アルフ

竣工日 2022年1月20日

建物概要

建設地 広島県広島市

延床面積 132.81㎡

敷地面積 140.10㎡

構造・規模 RC造3階建

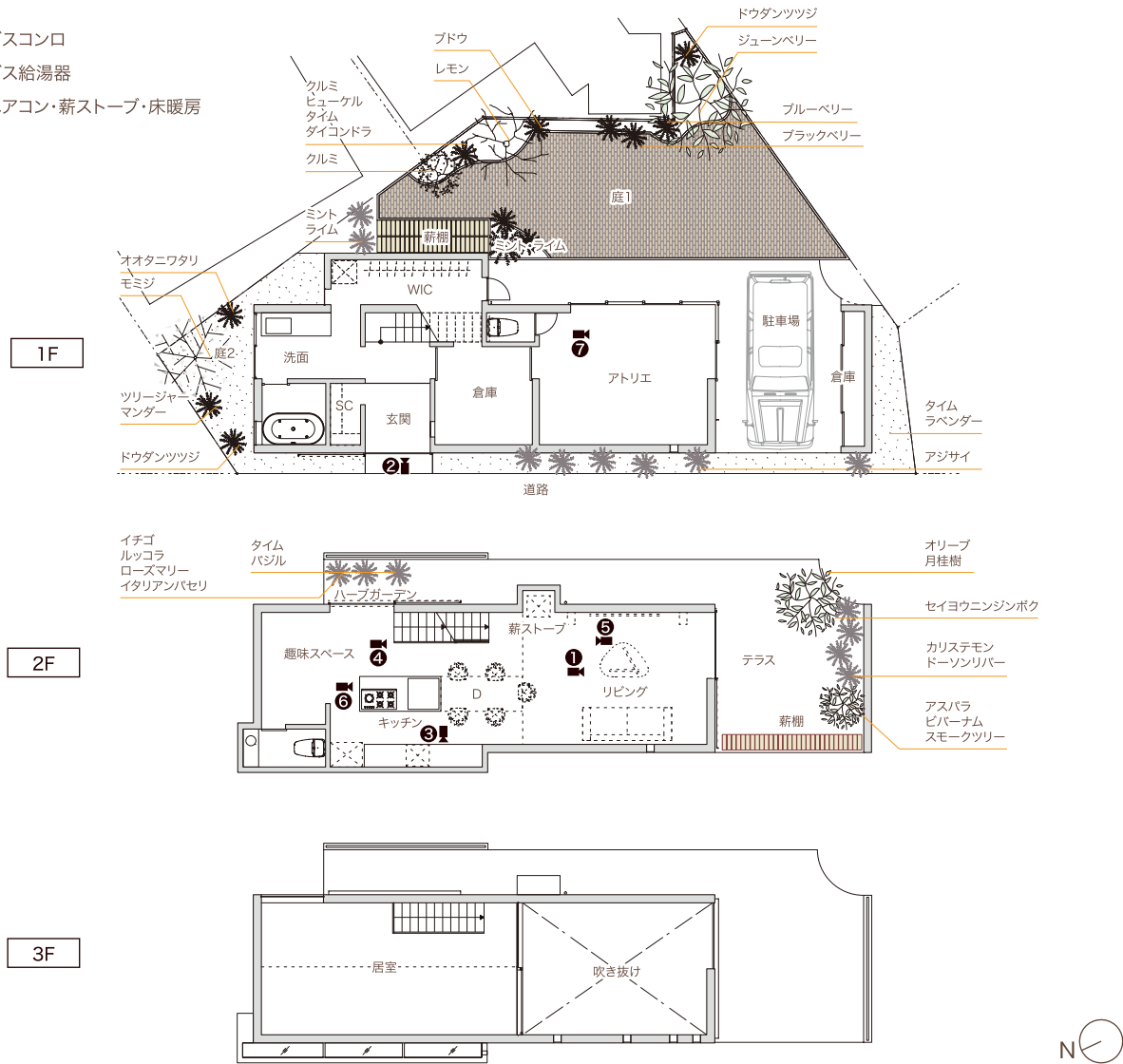
設備面の特記

厨房機器 ガスコンロ

給湯機器 ガス給湯器

冷暖房機器 エアコン・薪ストーブ・床暖房

平面図



設計コンセプト

以前より二間(約3.6m)という距離に心地よさを感じていた。食事をするにも、二間以上離れると遠くて一体感が感じられないし、ソファに座っても二間以上離れるとなんだか間抜けに感じるため二間より広くても結局近づいてしまう。もちろん空間の捉え方は感覚的なものなので個人差があるのだけれど、設計していると二間という寸法は何かと使いやすい。ということで、この住宅兼アトリエでは二間という距離を最大限堪能出来る建築にしようと計画を進めた。二間の間口を基本としてプランが進んでいくと、コンクリート打ち放しの建築はどうしてもパネル割りに引きずられて、なんだかんだと高さ方向もほぼ二間近くの寸法になったり、開口部も二間の半分に決まっていったりと、色々な作り手のルール(モジュールや

構造や法規)で決まっていくことが多い。一方、実際の暮らしはそれらとは全く関係なく営まれ、好みの家具や日用品が縦横無尽に配置され埋め尽くされる。作り手のルールが強すぎると実際の生活の営みとの間に色々とギャップが生まれて、勝ち負けが感じられるようで窮屈に感じていた。この建築では、作り手のルールと実際の暮らしが溶け合って混ざり合うような状態を目指した。そのため建築的な操作(床壁天井で覆う、開口を穿つ)は主張せず控えめに感じられるよう、可能な限り恣意性を抑えながら単純なルールだけで構成し、かつ周辺環境をうまく取り入れ調和することを必死に考えた。

審査委員講評

コンクリート、鉄、ガラスは自然素材の範疇に入るのか?そんな問いを私たちに突きつける作品です。一方、採光と通風を考慮した間口面積や位置、土地の特性を活かした南北の細長いプランはこの家に暮らす楽しさを保証してくれます。所々にあしらわれた木がアクセントになっていて、コンクリートや鉄のもつ冷たさを緩和しています。



①間口の広い敷地に対して、奥行き二間の建物を目一杯配置。空間を純粹に楽しむために柱や梁型は隠し、構造形式は壁式構造とした。各空間の用途に合わせて、高さは構造上の上限階高4mをマックスに決定し配置した。
②メインの間口にはエキスパンドメタルの網戸を設け、外出する際に施錠した状態で通風を確保。一間幅の引戸は壁面外付けとしているため、完全に引き切ることができ建具の存在が消える。内外をつなげ、暮らしを拡張するための重要なディテールとなっている。



③キッチンバックのトップライトから差し込む光が、奥まったキッチン进行く照らす。雨上がりには写真のような水滴の影を落とし、生活に彩りを与える。
④3階から差し込む光が、鉄骨階段を介して下階にも届く。階段上部のステンドグラスは、テーブル面や床面に色の付いた影を落とし、時間や季節の移り変わりを気づかせてくれる。



⑤ハンターストープ社の薪ストーブは、3次燃焼システムの採用により、厳格化される欧州連合の環境規制にも対応するクリーン性能を誇る。冬場の暖房は壁面に半埋め込みで設置された薪ストーブをメインに、床暖房を補助として使用している。
⑥コンクリート造で85cm角の正方形のシンクを設けたキッチン。料理好きな友人たちと釣った魚や、食材を持ち寄り、皆で料理をしながらお酒を楽しんでいる。
⑦木製建具を壁に引き込むと、屋根のある半外部の駐車場および庇のかかる庭とダイナミックにつながる1階のアトリエ。内外一体となった空間の拡がり住空間をより豊かにする。

新築
住宅部門

審査委員特別賞

寺岡徹建築事務所
寺岡 徹

【作品名】
石内の家



③地元のヒノキ材を使用し、野地板は地元産材のCLTとした。室内フローリングやデッキは無垢材を使用し、長期スパンでメンテナンスをしながら愛着を持って使用できる計画とした。

設計コンセプト

コロナの時代を経て、“戸建て住宅のニュースタンダード”は何かを考えたプロジェクトである。
建物としては、4間×4間の2階建てに大屋根を掛けたシンプルな構成で、2階は開放的なリビングとし、1階は生活を支える機能的な空間とした。在宅時間が増え、郊外に生活する中で、豪邸でなくても生活や仕事、趣味などを充分に楽しめる空間と収納を備え、家族を支える家考えた。
土地の特徴として、放射状に隣家が向かう生活の視線が交わらない敷地で、住宅地の端に位置する抜けのある場所であった。扇状地の端部にある崖地に近い敷地は、まさに広島らしい地形で、優れた環境を最大限に活かすため、2階のリビングはデッキと連続させ、明るく風通しの良い空間を作り、広島 の山や町の風景と繋がる

リビングとした。1階と2階の異なる空間で、無理のない豊かな日常体験を住宅で実現している。
一方で、計画時はコロナの影響により海外との流通、経済と関わる建材が高騰し始め、施工が危ぶまれる時期であった。しかし、本来住宅は地域でつくられるものであり、失われた地域循環を取り戻すように、住宅をつくりながら再び地域の関係の中で家づくりをすることは可能かと考え始めた。
地元産材の活用された木が感じられる木造住宅としての姿、仕上げる“密度”を意識した木組み意匠、広島 の地で長年の経験がある工務店との協働、それら全てを習合的に捉え、家も空間もコストもあらゆる問題を乗り越えていけるような地方における住宅の未来を目指した。

審査委員講評

崖地に近い立地を活かしたデッキ空間と、大らかでありながら軒厚が薄いシンプルな外観が印象的な住宅です。眺望の良い2階をリビング・デッキなど生活のプラットフォームとしながらも、1階では巧みに陽光を取り入れ上階とは違う趣のある空間に仕立てています。一体的なリビングとデッキは障子などにより可変性を持った採光を実現し、大きく張り出した軒と合わせて気持ちの良い縁側空間となっています。

新築
住宅部門

審査委員特別賞

一級建築士事務所 中村建築 株式会社
中村 堅志

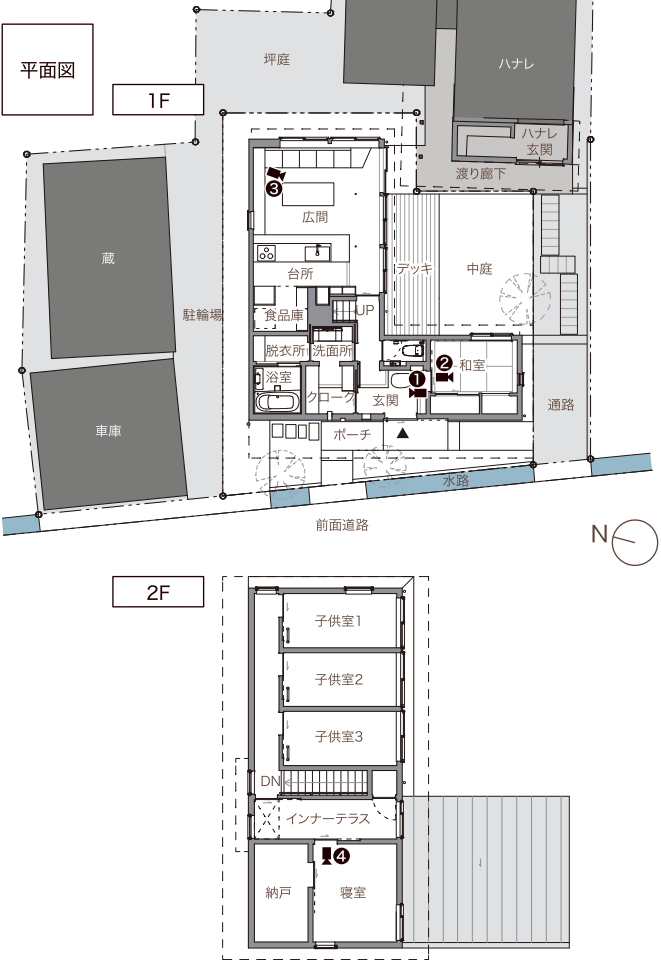
【作品名】
あたらしい家



写真撮影／平井 広行

設計	一級建築士事務所 中村建築 株式会社
施工	有限会社 秀建
竣工日	2022年7月31日

建物概要	
建設地	鳥取県鳥取市
延床面積	106.30㎡
敷地面積	127.74㎡
構造・規模	木造2階建



①県産材のスギ縁を利用した杉が香る玄関。通りに面してはプライバシーを配慮して開口部を抑えている。
②接客空間などパブリックな用途として欠かせない和室は、中庭に面して配した。曇りの多いこの地域で日光の恩恵をもらす。



③構造材・内部造作化粧材は鳥取県産のスギ材を使用し、地産地消・脱炭素化に努めた。開口部は全てLowEガラスとし、1階広間の南面開口部は断熱サッシとすることで冬季の日射を有効に取り込む。
④ロフトのある2階寝室。自然通風を可能とするため全ての居室に2面開口を用意。南北を軸に並ぶ2階にはロフトに換気窓を設け、南風を通し重力換気による通風を実現。寝室の横のインナーバルコニーは、降雨の多いこの地域では風の抜ける物干し場となる。

設計コンセプト

敷地は鳥取市の中山間部の集落内にある。広い敷地内に、母屋と改修したハナレのほか車庫や蔵などが増築を繰り返して一体化し、密集した建物群に2世帯7人で住んでいた。そこで、両親はハナレへ移り、母屋を取り壊し子世帯家族5人のための住宅を計画することになった。
まず敷地の中心に「中庭」を据え、ここを2世帯がつながるためのスペースとし、この中庭に面して親世帯の住居となるハナレの玄関と渡り廊下、接客空間などパブリックに使用する和室を配した。また2階部分は片流れ屋根により作られたロフトを持つ家族5人のための独立した寝室群とした。
一体化していた建物群を切り離し、風と光を取り込むため作り出した「隙間」を中庭や駐輪場・通路などにあて、雨と雪から逃れる軒下

空間がそれら隙間に寄り添うような構成としている。
とかく地方においては、「法規制のゆるさ」と「立派である事＝大きい事」からくる過度なボリュームによる無秩序な建て替えや、慣習的な家構えによる閉塞感、雨雪から身を守るように閉ざしたそれまでの暮らしの無意識な踏襲を目の当たりにしてきた。
今回の建て替え計画では、周囲の街並みを逸脱しないようなボリューム検討と無駄を省いた最小限の空間提案を重ね、通りに面しては開口部のない板壁と軒下空間によりプライバシーを確保。建物配置を通りから90度ふり南面させることで、集落の中に明るく落ち着いた住空間を作り出そうとしている。

審査委員講評

水路のある風景になじむ外観にデザイン力を感じます。ドライガーデンも新鮮です。一方、敷地の中心にある中庭を通して光と風が通る建物の配置は、カーテンいらず。曇天の日が多い地域の特性に対する回答です。一見、斬新な建物に見えて快適性は損なわれていません。鳥取県産のスギ材を使っているのも好印象です。

最優秀賞

東京理科大学
丸山 周・佐古 統哉

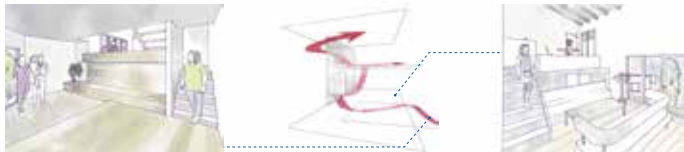
【作品名】
借り、整え、還す

1 SITE 杉が町を災害から守る千葉県山武市



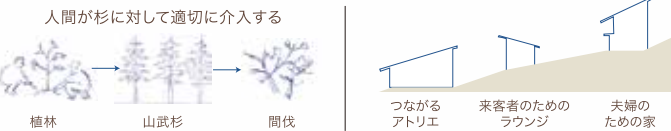
千葉県山武名産の山武杉は非常に堅牢で、その性質故に建築部材とするために植えられた。またよく手入れされた杉林は災害時、根が土砂災害を未然に防ぎ、葉が暴風をやわらげ大きな被害を未然に防ぐ役割も担っていた。しかし近年、手入れの不足や境界木の伐採、メガソーラーの建設による土壌劣化や光害により山武杉林は弱体化し、町を災害から守る力は失われ、逆に台風時に病気の杉の倒木が町に被害を出すまでになった。我々は杉との持続可能な関係をもう一度取り戻さなければならない。

3 SEQUENCE 視線が交錯する動線計画



斜面を登って回り込むような階段動線の先に吹き抜けのリビングが広がる。個のリビングを介して下方のエントランスと上階のダイニング、キッチンからの視線がつながり、彩りのある生活の光景が浮かび上がる。また東西に設けられたバルコニーは生活空間を外に拡張し傾斜地ならではの眺望を心地よく室内に招き入れる。

2 PROGRAM 杉林を整え適度に消費する



山武杉が健全に生育し、利用可能な資源となるためには人による適度な介入と消費が必要である。山武杉の循環は、あらゆる意味で地域の持続可能性に大きく寄与するキーストーンである。この山の麓の中学校を卒業した夫婦が、セカンドライフとして子どもたちや地域の人たちと木工を通じて関わりあう「つながるアトリエ」「来客者のためのラウンジ」「夫婦のための家」からなる住宅を設計した。地域全体が木に親しみ、木を消費し、そして杉林を手入れすることが地域の持続可能な循環に繋がる。

4 SECTION 杉を生かし、杉に生かされる暮らし



設計コンセプト

私たちは、サステナブルな循環を地域全体へと拡張させる建築の在り方を提案します。この住宅の計画地は千葉県山武市の山林です。この地では、人が杉を植え、手入れをし、間伐を行い、伐採し利用してまた育てていくという、杉と人間とのサステナブルな循環が脈々と続いてきました。しかし、この循環は人間が杉の手入れを怠り強引な山林開発を行った数十年の間に崩壊していきました。今、私たちは積極的に山武杉と関係を持つ暮らしをもう一度考える必要があります。この住宅は、地域に開かれた「つながるアトリエ」、「来客者のためのラウンジ」、夫婦の暮らしの拠点となる「夫婦のための家」の三分棟で

構成されます。三棟をつなぐ基礎は、夏はクールピットとして、冬はヒートチューブとして利用することで、一年を通じて冷暖房負荷の少ない暮らしを実現します。また、間伐材を燃やした際に生じる灰は煙の肥料として利用し、農作を通じた資源の循環を実現します。さらに、「つながるアトリエ」は麓の中学校に通う子どもたちや地域の人々が創作活動を行う場であり、積極的な木材利用を推進するとともに、世代を超えて山林への適度な介入や循環の大切さを学ぶ場となります。夫婦の暮らしと地域のコミュニティが山武杉を介して接する住宅。杉が根を張り土をつなぎとめていくように、山武杉と人との接点が地域を巻き込んだサステナブルな暮らしをつなぎ、循環させていきます。

審査委員講評

昨今、なにかと厄介者扱いされている杉の木と人間がいい関係を構築するには？その問いに具体的に答えてくれています。プロジェクト全体を説明する断面図のイラストはとても見やすく、わかりやすいものです。いくら独創性に富んだアイデアでも、それを人に伝える技が稚拙であれば意味がありません。その点、この作品は秀逸です。

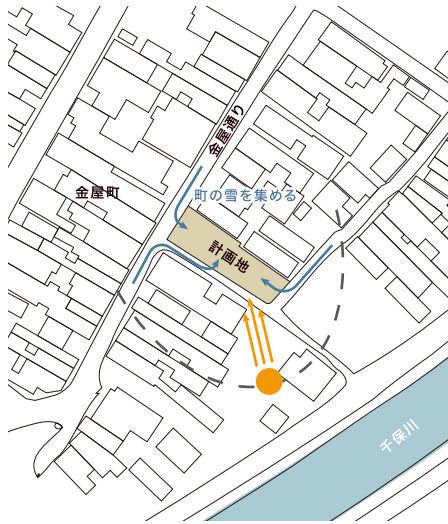


東京工業大学
森野 涼帆

【作品名】
雪仕舞いを澄ます
-「邪魔者」の雪を「資源」として利用する町屋住宅の提案-

1 敷地: 富山県金屋町 空き地

富山県高岡市にある金屋町は古くから鋳物業で栄え、土蔵を敷地奥に持つ町屋が並ぶ。

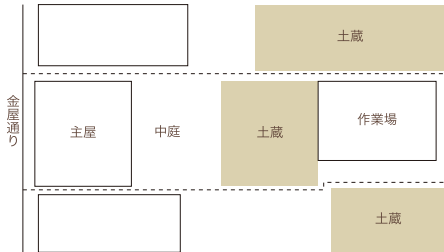


2 かつて存在していた雪国の知恵

富山県は豪雪地帯である一方で、温暖化により降雪量が減少した。それに伴いかつて存在していた「雪室」や「雪山」といった雪を賢く利用するための技術は失われた。しかし、近年では大雪による災害や町内での除雪の問題などが浮き彫りになっている。そこで、見えなかった土蔵を町へ開き、かつての知恵を再編することで、邪魔者として扱われる雪を資源として利用し、季節を楽しみながら地球への負担を減らす住宅を提案する。



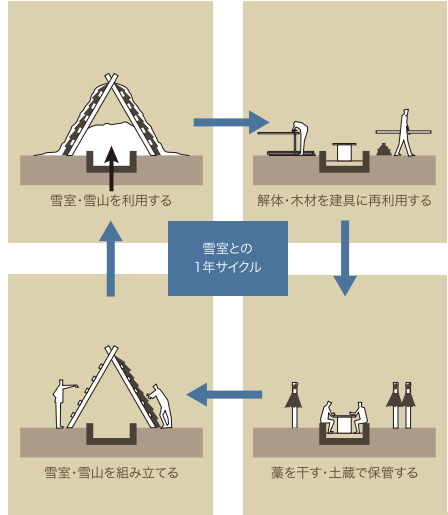
かつて存在していた雪国の知恵



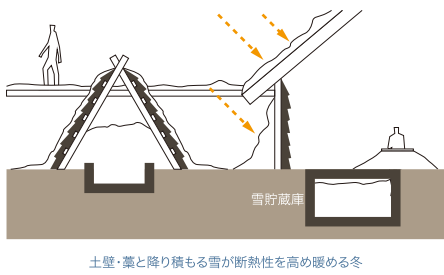
見えない土蔵が存在する町並み

3 地域の環境からつくる循環

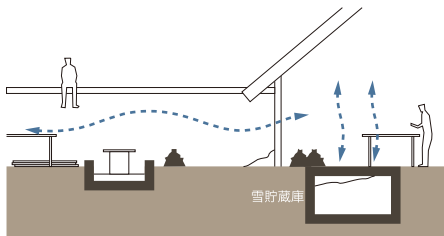
冬季に建てる仮設の雪室と常設の土蔵を中心に資源の循環が生まれる。



4 暖と涼を棲み分ける



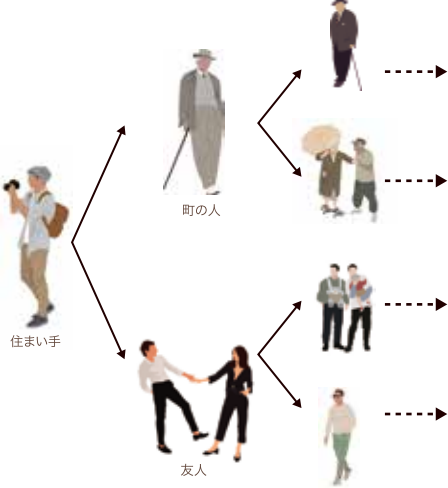
土壁・藁と降り積もる雪が断熱性を高め暖める冬



溜め込んだ雪から涼をとる夏

5 個人から広がる交流

雪を集め、土蔵を開くことで、住まい手個人から友人、町の人へと交流が広がり、町の一部になっていく。



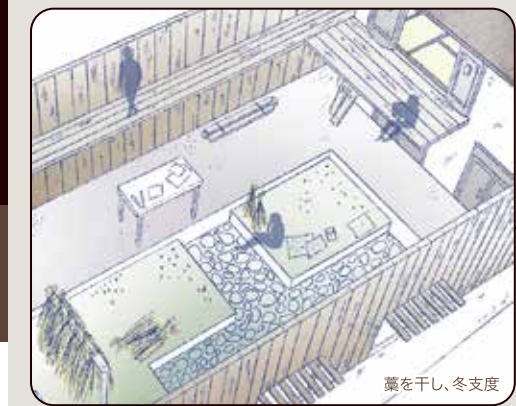
設計コンセプト

敷地となる富山県高岡市金屋町は、鋳物業で栄え、短冊状の敷地の奥には見えない土蔵が存在する。また、豪雪地帯である一方、温暖化とともに降雪量は減少し、かつて存在していた「雪室」や「雪山」といった雪を資源として利用するための技術は失われた。しかし、近年では大雪による災害や町内での除雪トラブルなど、雪による問題が浮き彫りになっている。技術を失った結果、雪は邪魔者となり、道路に投棄されたり、川へ捨てられることになった。そこで、見えなかった土蔵を町へ開き、かつての知恵を再編することで、邪魔者の雪を資源として利用し、季節を楽しみながら地球への負担を減らす住宅を提案する。雪を資源化するためにいくつかの操作を行う。まず、雪室を夏に解体、冬に建設することで1年サイクルを作る。藁や木材はその都度、建具

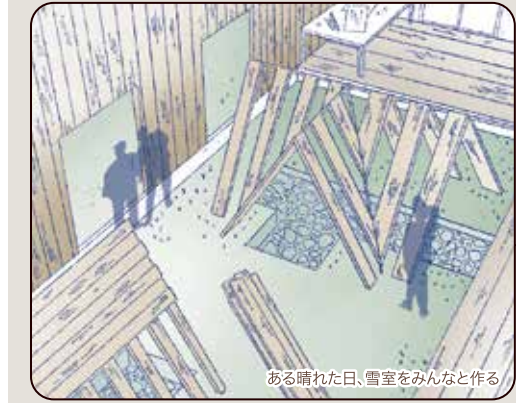
や家具、次の雪室に再利用される。次に1年を通して雪を残すために雪貯蔵庫を設ける。雪は食料の保管等に利用され、電気やガスなどに代わるエネルギーとなる。また雪貯蔵庫から主屋まで、冷気が吹き抜けるため、天然の冷房となる。そして、主な滞在場所となる書斎兼寝室を二つ用意することで、気温によって部屋を選択可能とした。主屋の方は南向きの部屋で光が入り、また暖かい空気が吹き抜けから上がってくる。一方で、暑苦しい夜には土蔵側の寝室を使う。土蔵は室内温度が一定に保たれるため、夏は涼しくなり快適に過ごすことができる住宅となった。

審査委員講評

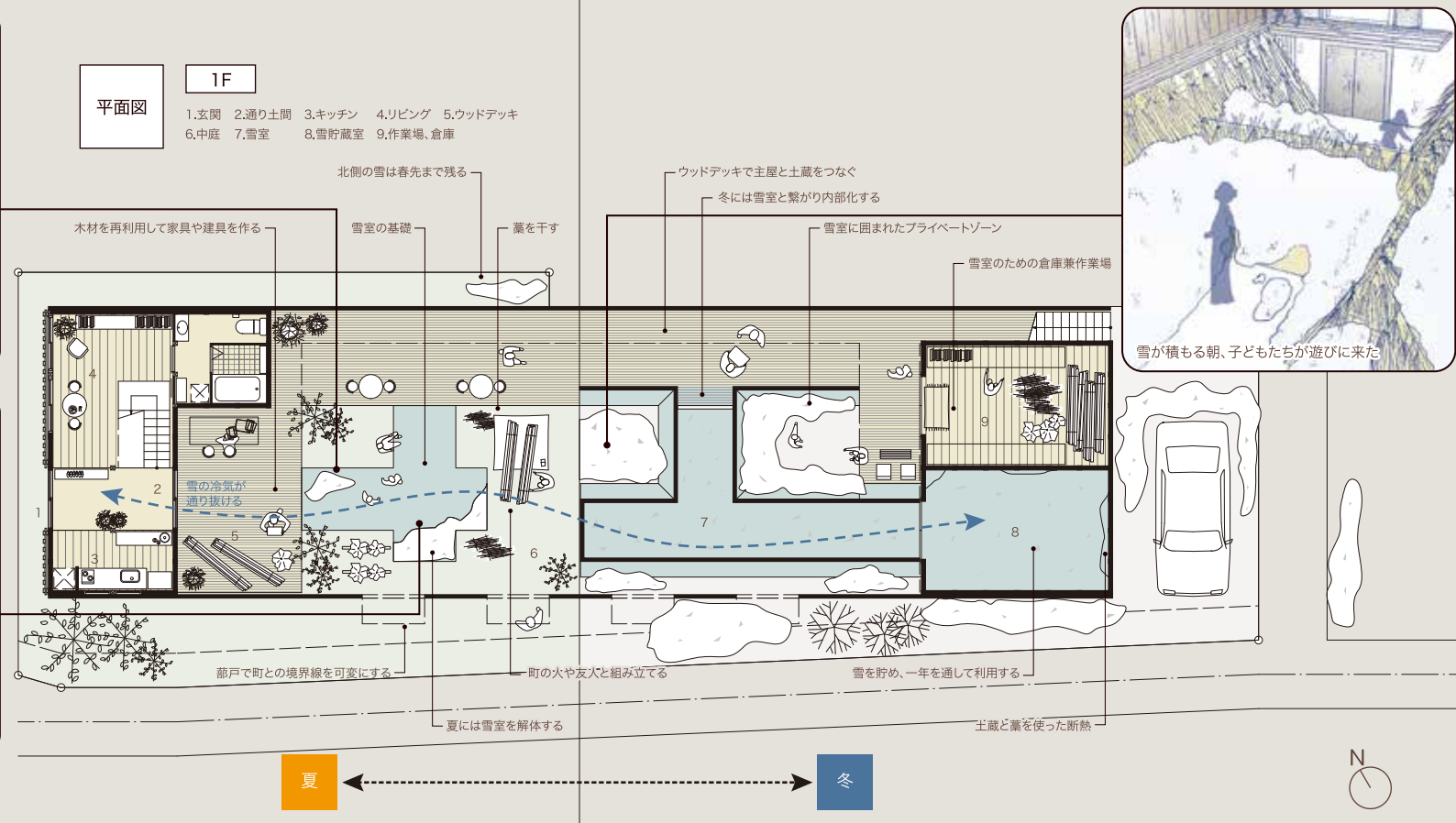
かつての雪国の知恵である雪室を土蔵のある建築に取り込んだ提案です。中庭の仮設雪室と土蔵を常設的に雪室として使うことで邪魔者として扱われる雪を冷蔵庫や夏場のクーラーとして利用する。有用な雪室のスケールや作業スペースの広さには多少の疑問は感じますが、建築に取り込むことで邪魔者を資源に変えようとする提案には好感を持ちます。



藁を干し、冬支度



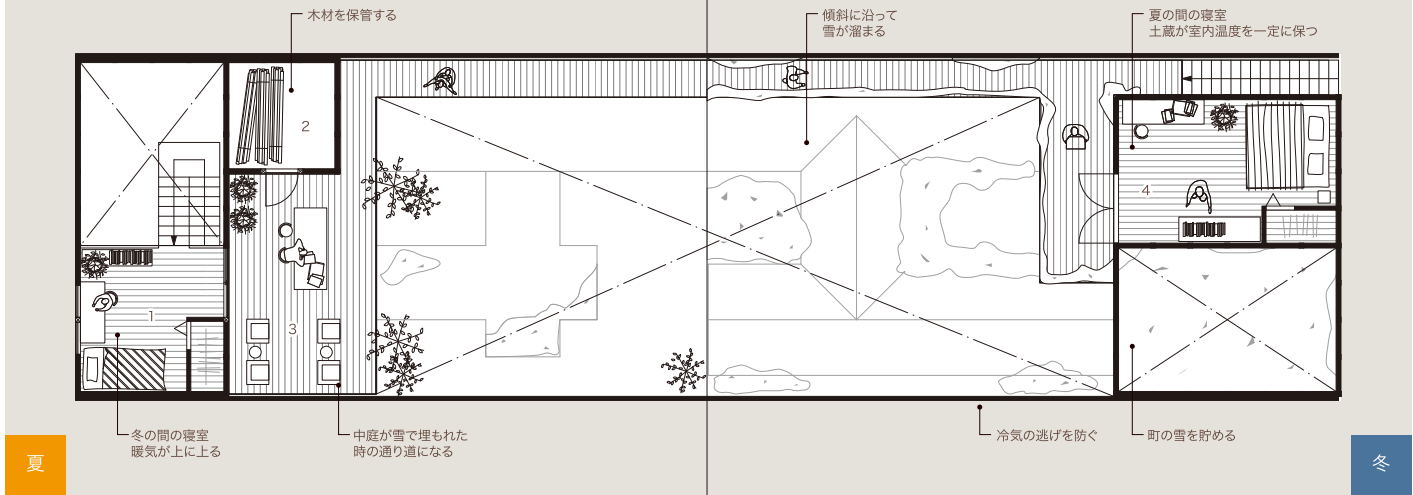
ある晴れた日、雪室をみんなで作る



雪が積もる朝、子どもたちが遊びに来た

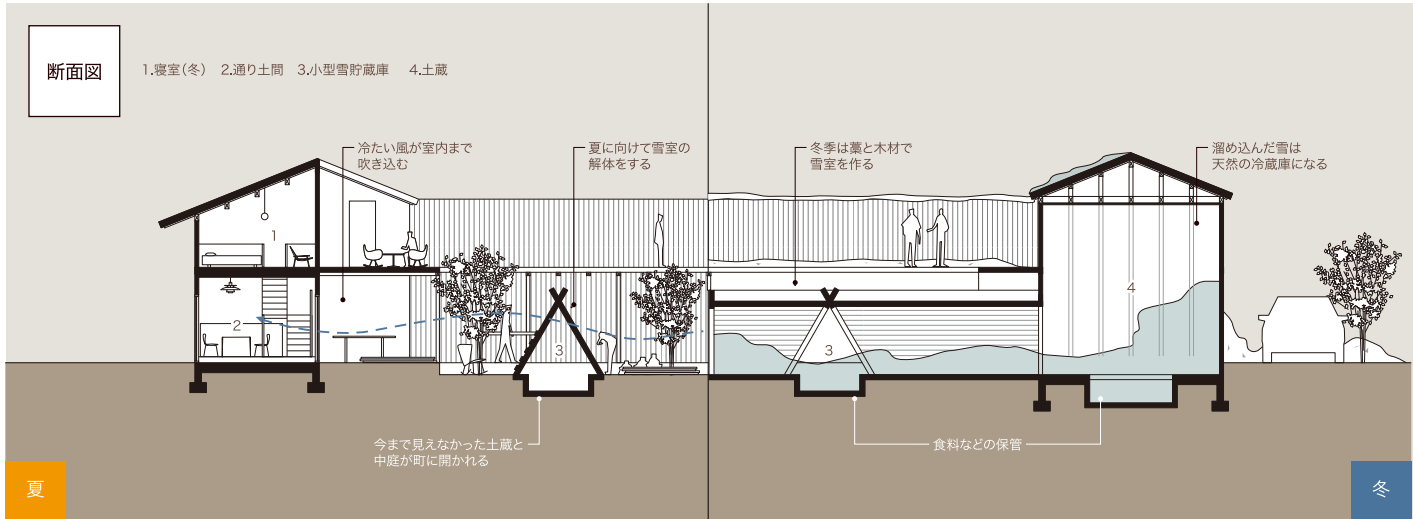
2F

1. 寝室 (冬) 2. 倉庫 3. ウッドデッキ 4. 寝室 (夏)



夏

冬

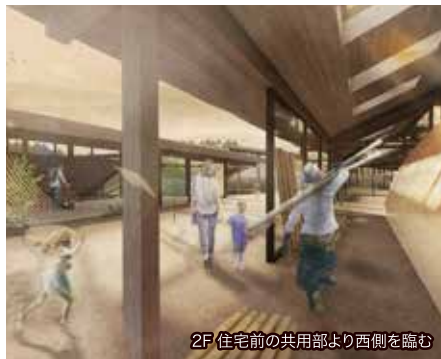


夏

冬

大阪大学大学院
化生 真依・川岡 知樹・吉田 英亜

【作品名】
舞鶴の共竹居



1 自然素材「竹」を選択した理由

SDGs	サステナブルで豊富な植物 ・製造時のCO ₂ 排出量が少ない ・成長速度が木材の10倍程速い	快適性	快適な住空間を創生するポテンシャル ・抗菌、消臭、保温、断熱効果 ・柔らかな光を反射させる	建材価値	しなやかで優美な曲線 ・高い曲げ強度 ・節のリズム感などの意匠性
------	---	-----	---	------	--

近年「竹建築」は持続可能な建築として注目

2 竹の製材加工場を有した集合住宅

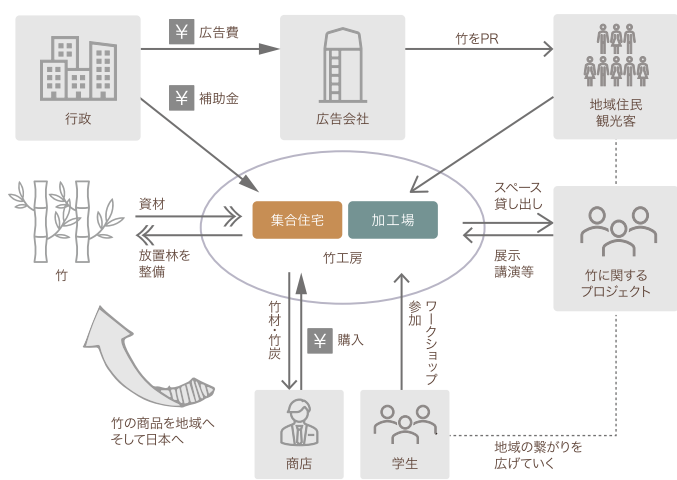
■使われ方

集合住宅	加工場
・コミュニティの拡大 ・竹加工工程で生じる熱源を利用した環境負荷低減	・放置林問題の解消 ・放置林を竹炭などに加工することで、収入を得る

2つの機能を組み合わせた、竹を介したサステナブルな暮らし

4 スキーム図

■竹の魅力世に発信する魅力的なプラットフォーム

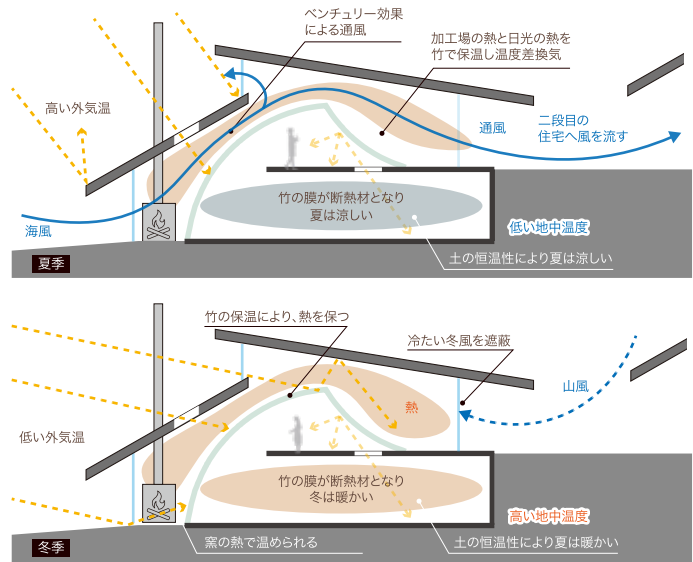


竹林問題を快方へと導きながら、人と竹が共生することができる暮らしのサイクルを創生

審査委員講評

成長の速い竹に着目したサステナブルな集合住宅の提案。特に製材加工から環境設計、そして社会へ向けた一連のスキームへの関心が興味深かった作品です。一方、その環境を含めた循環をもう少し丁寧に設計できていると更によかったと感じます。しかし竹害問題をテーマに取り上げ何か建築を通して解決しようとする姿勢は評価できるものでした。今後も社会の持続可能な在り方を思考し続けて欲しいと思います。

3 環境設計



加工場の恩恵を受ける、竹に囲まれた快適な住空間

設計コンセプト

本案は「竹」を活かしたサステナブルな集合住宅である。竹は短期間で成長し、加工時に二酸化炭素をほとんど排出しないことから、サステナブルな建築資材として注目を集めている。我々日本人にとって、竹は『竹取物語』『竹馬』『竹とんぼ』など、日本文化を感じさせる馴染み深い植物の一つと言えるだろう。一方で、昨今管理者を失った放置林による被害が後を絶たないのである。そこで、府内最大の放置林を抱える舞鶴市に、竹の製材加工場を有した集合住宅を計画する。職人が敷地背面に茂る竹を加工場へ運び、製品化する新たな流れを生むことで、問題を快方へ導き、人と竹が共生する暮らしのサイクルを創生する。そして竹材の販売や竹灯りイベント等により、活動連携を促して地域の輪を広げていく。

また竹と加工場は、環境負荷を低減し、快適な住空間の創出にも寄与する。竹の特性である消臭・抗菌・断熱性能やしなやかで優美な曲線は、唯一無二の心地よい空間を演出する。この竹の曲面架構は、南面の日射熱や加工場の発熱に対して、夏には温度差換気を促し、冬には高い保温性を発揮する断面計画とした。他にも夏の海風が住戸一帯に流れ込む配置計画、冬の山風を遮り地中熱を利用する空間構成などにより、一年を通して快適な集合住宅を設計した。『共竹居』は竹林問題解決の一翼を担いながら、竹を中心としたコミュニティを地域に芽吹かせ、竹の魅力世に発信するプラットフォームとなっていく。

